



だったそうです。それを知った生活改良普及員さんが講習会で下着や生理用品を古布で手作りする方法を教えてくれて、本当に助かった。長男が高校生になる頃、息子の学費くらいは自分たちで出したいと同じ境遇の母親たちと話し合い、生活改良普及員の勧めもあり、貯金のため自分名義の口座を作ったそうです。それで「嫁」としか呼ばれなかった女性たちが、自分の名前が書かれた貯金通帳を手にしたときの喜びは、今思い出しても涙が出ると語っています。

最初は自分が収穫した野菜の無人販売の売り上げをコッコツと積み立てていったわけですが、その過程で三人の子供たちを大学に行かせにはいつまでにか必要かという生活設計も生活改良普及員さんから学び、「私の進化が始まった」と実感したそうです。毎日黙々と働いただけだった女性たちに個人としての尊厳が与えられ、将来の展望が開けたということでしょう。生活改良普及員の支援により「農家の嫁」から「人間」へ進化した」とMさんは振り返ります。その意味で郵便局で扱われた郵便貯金や農協の貯金が果たした役割はとても大きかったでしょう。同じことは長野以外にも全国各地であって、やはりとても励みになったようです。

——前提として、当時は郵便局というのは虎の子の大事なお金を預けるに足る、信頼できる存在だったのです。

太田教授 もちろんそうです。身近にあつて信頼のおけるところに自分の大事なお金を預けることができる環境があつたのは幸いでした。それと、当時は農家が保険に入るなんて発想がなかったのですが、機械化が始まって、事故も起きるようになり、生活設計をする中で、簡易保険や年金に入るようになったと聞いています。それも当時から郵便局が地域に根差して信頼を得ていたことがうかがえるエピソードだと思います。

——一九八〇年代になると、ふるさと小包も励

みになったようですね。

太田教授 長野県でも、リンゴやナシを農家女性たちの名前、生活改善グループの名前、婦人会の名前で販路を開拓してもらえて、奇麗なパンフレットに載せてもらえたことが非常に励みになったそうです。また沖縄県石垣市の川原では缶詰用パイナップルの生産で栄えていたのですが、一九八〇年代後半には海外から安い輸入缶詰が流入するなどした結果、島内の缶詰工場が閉鎖してしまったのです。出荷先を失ったパイナップル農家は、当時まだ一般的でなかった生果としてパイナップルを売る方法を模索しました。そこで女性たちは一致団結して郵便局と相談し、ゆうパックを使ってどこまでの範囲なら生のまま腐らずに送れるか「大阪なら大丈夫か」「東京までいけるか」と実験しました。郵便局の協力を得て試行錯誤を繰り返した後、青果のパイナップルはふるさと小包として大ブレイクし、パイナップル農家の窮地を救ったというのです。郵便局と女性たちの協力で、突破口を見出したのです。農村では閉じられた世界になりがちですが、そこに郵便局というハブがあることで外と繋がりを持ち、社会が、展望が開けていったのだと思います。この川原婦人パイナップル会のふるさと小包は今でも人気の商品です。

特集

未来志向の地方創生 地域を元気に!

第95回

～地域の暮らしを支える仕組みと人づくり～

太田美帆・玉川大学リベラルアーツ学部教授 に聞く

地域の方々が生き活きと活躍できる社会を
郵便局は人と人を繋げる安全・安心の拠点

聞き手 一般社団法人 通信研究会 事務局長代理 福島 徳

——先生の研究内容についてご紹介ください。

太田教授 研究分野は国際協力、農村社会開発です。戦後日本の農村における生活改善経験を紐解き、現在の途上国における農村社会開発に活かすことをライフワークとしています。私は一九九〇年代後半にアフリカのガーナで青年海外協力隊 村落開発普及員として二年間、電気も水道も井戸もない農村に住み、活動しました。川から水を汲み、薪で調理し、暗くなればろうそくでランタンを灯し、蚊帳に入って眠る。そんな暮らしぶりを写真で見た大正生まれの祖母が、「私の小さいころと同じ」と言ったことに、私はとても驚きました。ガーナでは何百年も変わらなず続いてきたかのように見えるこの生活様式を、日本では昭和の前半に一変させたことに気づきました。そして祖母の世代がその生活の近代化を担ったのだと。

また生活様式だけでなく、ガーナで課題だった農村女性が担う家事・育児・農作業・地域活動による過重労働、栄養不良なども、昭和初期の女性たちと同じでした。では昭和の女性たちはどうやってこの境遇を改善していったのか。帰国後、私はこれを研究テーマに据えました。そこでたどり着いたのが、戦後日本の農村で生活向上に奮闘した生活改良普及員の存在で

す。生活改良普及員さんは農村を自転車で巡回し、個々の農村女性に寄り添って、密なコミュニケーションを取りながら、生活を改善する様々な活動を展開していました。私がガーナで取り組もうとしていたことを、日本では半世紀以上も前に取り組んでいた方々がいたのです……。生活改善普及事業が始まったのが昭和二十三年。農地改革もあり、戦後復興の混乱のなかにあった農村社会において、農家の嫁、農業の働き手として「角のない牛」とさえ呼ばれた女性たちを対象に、生活改良普及員さんは生活技術の向上を通して、名前を持った個人であることを自覚させたり、女性が尊厳をもつて生きられるような時代づくりをしてきました。私は生活改良普及員さんたちを師として、日本各地のフィールドワークを今も続けています。

——そのプロセスの中で郵便局の果たした役割もあるのでしょうか。

太田教授 たえば長野県下伊那郡松川町の現在九五歳のMさんは、農家に嫁に来てからどれだけ忙しき働きまわっても収入はすべて家長の懐に入り、一銭ももらえなかったため、男に頭を下げて正月に実家に帰り、下着を買いなお金を実家からもらっていた。当時はそれが当たり前

「今、先生が挙げた地域も含めて、地方では人口減少、高齢化、過疎化が進んでいます。これらをしてできるだけ緩やかにするためにはどうしたらいいのでしょうか。」

太田教授 難しい課題ですね。例えば石垣市では、「南の島々から八重山の味つたえ隊」というグループが特産品の生産加工販売で活躍しています。生活改善の実績を積んだ現在八〇代の女性たちが中心に立ち上げたのですが、今ではその背中を見てきた娘世代がＵターンしてグループに入り活動を担うようになっていきます。子育てをひと段落させた娘世代が島に戻ってこれて、母の味や活動を引き継ぐとしてくれるわけです。生産加工販売には定年がないのが魅力です。好きなだけ働けます。やはり、地域に住まう方々が元気に生き活きと活躍している姿があれば、若い世代にも地域で暮らすことが現実的な選択肢となってくるのではないのでしょうか。」

—— 地方といえば、先生は東日本大震災以降、岩手県陸前高田市で毎年、ゼミ合宿をされていますね。

太田教授 陸前高田でのゼミ合宿は、コロナ禍でのオンライン交流も含めて二〇二二年より継続して

います。当時は仮設住宅の集会所に寝泊まりし、最近では農家や漁家などの家庭にお世話になっています。民家に泊まることで、ご家族と学生間により個人的なつながりも深まります。合宿後も交流は続いて、卒業生たちが結婚の報告をしたり、転職したことを陸前高田の人づてに私が知ったケースもありました(笑)。

秋の学園祭では陸前高田の特産品を販売します。そのため合宿では生産者にその思いを聴き、生産や収穫の体験をして、売り方を考えます。陸前高田の何をどう発信するかを考え実践するのか秋学期の取り組みです。それをアウトプットするのが学園祭とキャンパスのある東京都町田市で行われる町田市市民協働フェスティバル「まちカフェ」です。これまでも陸前高田産のリンゴジュースやおやき、ゆず商品、わかめを使ったオーガニックシャンプーなどを販売し、陸前高田の様々な「味力(みりょく)」(学生による造語)を伝えてきました。ゼミではこのように学内外での実践から学ぶことを重視しています。

—— 陸前高田市での交流を踏まえて、地域社会における郵便局の役割とは何でしょうか。

太田教授 陸前高田を見ていると、若い世代が外に出てしまつて高齢者化が進んでいます。SD

Gsは、誰一人取り残されない社会を掲げていますが、「買い物難民」だとか「ＩＴ難民」など、誰かが取り残されがちな状況です。そういうなかで、常にそこに存在している安心感というのが郵便局の持つ社会インフラとしての大きな役割だと思っています。最近では各地の郵便局が買い物やＩＴの支援など様々な取り組みをしています。必ずそこに人がいるという意味で防災の拠点にもなるし、取り残されかねない人たちにとって「最後の砦」として頑張っていたのだと切に願っています。それと、昨年は郵便料金の値上げもあつて「年賀状じまい」も話題になり寂しく思いました。年賀状一枚でつながり続けることの大切さも痛感しています。人と人を繋げるのが郵便局の一番重要な役割だと実感しています。

略歴

太田美帆 (おた・みほ)

玉川大学リベラルアーツ学部教授。学生と共に国内の地域振興、ボランティアの実践と研究に取り組む。二〇一八～二〇二一年度、独立行政法人国際協力機構(JICA)青年海外協力隊事務局ボランティア技術顧問。二〇二二年度からJICA 国際協力専門員を兼務。アフリカ、中南米、アジアの栄養・生活改善普及に携わる。著書に「世界に広がる農村生活改善(晃洋書房、分担執筆)」「貧しい人を助ける理由」(日本評論社、共訳書)など。